

原 燎 火 星

中央大学学員会東京江戸川区支部会報
(題字：第二十七代中央大学総長・学長 酒井正三郎先生)

創刊号

発行所：中央大学学員会東京江戸川区支部
東京都江戸川区東小岩6-8-13-401
わかえ商事株式会社 内

TEL：03-5612-2340

編集責任者：小林 裕

発行責任者：阿部 勲

支部長挨拶



支部長 阿部 勲

新年あけましておめでとうございます。平素は当江戸川区支部にご支援ご協力をいただき、誠にありがとうございます。

私は、江戸川区支部第5代目支部長に平成18年に就任いたしました。あっという間に10年がたちました。これも会員各位と北村幹事長中心とした役員の皆様方のご協力のおかげと感謝いたしております。

私が中央大学に入学したのは、昭和45年(1970年)で、74年に卒業いたしました。まさに70年安保の真ただ中の時代に学生時代を送った訳です。当時は、大学紛争も完全に収斂したわけではなく何かにつけても騒々しい時代で、学生デモと機動隊との衝突が、御茶ノ水駅や大学周辺で繰り返され、大学はすぐにロックアウトになりました。当時は、4月半ばに入学式を行うとすぐにゴールデンウィークで休みとなり、さらに、7月になると夏休みという慌ただしい生活でありました。当時の校舎は神田駿河台の狭い校舎の中で文系学部が一緒に学んでおり、とても狭い空間に学生がひしめきあっていたと記憶しています。

そうした中で、53年4月に多摩校舎が開校し、55年に駿河台校舎の閉校式が行われました。雨の中で行われた提灯行列に、中大卒業生の家内と一緒に参加したのを昨日のように覚えております。提灯行列は、野球部が優勝した時など神宮球場か

ら駿河台校舎まで、何度か参加しましたが、多摩校舎までの提灯行列は遠くて大変だと思いましたが、幸か不幸か優勝から見放されておこなわれてないようです。

昨年11月に創立140周年(2025年)に至る今後10年間の「中長期事業計画」が大学より発表されました。その中で文系学部の一部都心キャンパスへの移転が発表されました。誠に喜ばしいことです。

中央大学は、その名の通り東京の中央に立地しなければならぬと思います。中央に立地してこそ、東京都をはじめとして近隣の各地から優秀な学生が数多く学ぶことができていくと思えます。緑豊かな広大な多摩キャンパスはそれなりの良さを感じますが、江戸川区からはあまりにも遠くにあります。東京の東に位置する江戸川区からの卒業生は駿河台時代と比べるとその数は大きく減少しております。

「私は御茶ノ水が大好きです」
やと「こおーこおーはお江戸かあー 神田のまちかあー 神田の町なら大学は中央」学生時代に歌った「中大節」を歌うことを許されたような気がします。都心に立地する大学であればこそ、声高らかに歌うことができる喜びに早く浸りたいです。江戸川区支部の会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

中央大学学員会
東京江戸川区支部 常任顧問

有隣グループ 代表取締役社長
澤 幡 仁 (32経)

〒103-0021
東京都中央区日本橋本石町4-4-9
TEL:03-3241-2204

中央大学学員会
東京江戸川区支部 相談役

永 吉 正 令 (32法)

〒134-0084
東京都江戸川区東葛西5-12-12-1201
TEL:03-3658-8197

中央大学学員会
東京江戸川区支部 支部長

わかえ商事 代表取締役
阿 部 勲 (49法)

〒103-0021
東京都江戸川区東小岩6-8-13-401
TEL:03-5612-2340

星火燎原とは

副支部長 小林 裕



星火燎原とは、星の光は極わずかで儂いなものである。その星の光が野原に落ちて火が付き、やがては、広大な野原を焼き尽くすような巨大な炎と変貌していくという意味である。また、星火を人間の理想ととらえ、最初は、取るに足らぬ考えであっても、時を得て、ある思想や考えが世の中に広がり、蔓延し、やがては、当初、不可能と思われたような革命もやがては実現するということの喩えである。

私は、神田駿河台の生まれで、中学校は三年の十二月まで、夏目漱石先生の卒業した千代田区立一ツ橋中学校に通っていた。そこで、夏目先生の後輩にあたる。また、専門も夏目先生と同じ英文学である。卒論は、サマセット・モームに関する考察だった。

昭和四十八年に文学部文学科を卒業し、千葉県公立高校

教諭に採用され、平成二十三年三月まで英語科教諭として三十八年間務めた。千葉県立船橋高校でも十五年間、教鞭を執った。ライフワークは、国際交流で、毎年海外に渡航し、継続して研究している。

あの安田講堂事件の昭和四十四年が、大学入試の年で、明治以来、唯一、東大入試の無い年だった。受験会場は、当時、水道橋にあった通信教育部の木造校舎だった。中央大学を受験したのは、馴染みのある御茶ノ水にあり、授業料も、当時、国立大学が三万五千円で、中大は六万五千円と私立大学の中で一番安かったからだ。自宅は総武線の平井にあり御茶ノ水までの乗車時間は十分程度だった。しかも、文学部の校舎は、御茶ノ水駅の聖橋口(千葉より)から二分程度で、通学時間は通算しても約三十分程度だった。そんなわけで御茶ノ水には馴染みがあり、古書店街もあり研究資料の獲得、学習の面でも利があり、経済的にも、時間的にも、貧しい学生にとっては様々な利点があり、中大受験の最大の理由であった。ただ、七十年安保関連の大学紛争のため御茶ノ水校舎のロククアウトが続き、昭和

四十四年の八月になって初めて、多摩の校舎建設予定地で授業が再開された。鉄条網に囲まれた建設現場の飯場のプレハブ小屋のような場所で、敷地の入り口で、機動隊に学生証を提示して、中へ入った。授業は、集中講義で午前中に講義を受け、すぐその日の午後、その科目のテストがあった。午前九時ごろから始まり午後四時ごろの終了だった。さらに、私は、その後、すぐに、水道橋に向かい、通信教育学部の校舎で教職課程の授業を、午後六時から二時間ほど受け、午後九時ごろから教職科目のテストを受けた。家に帰ったのは午後十一時を過ぎていた。シャワーを浴び、予習をして、翌日の午前二時に寝た。三時間程度の仮眠の後、五時半に家を出るの繰り返しだった。新宿より西に行ったことがなかった私にとっては、本当に時間的にも、交通費の面でも厳しかった。

さて、学員会東京江戸川区支部は、東京の東の端にあり、中央大学多摩校舎は、東京の西の端にある。そこで当支部は、一日も早い、中央大学の日の出する二十三区内への復帰、再生を願って、江戸川区支部会報を創刊するものである。

新帰去来の辞

中大の凋落ぶりを嘆き、都区内(二十三区内)回帰を強く願って詠む

教授会よ、中大よ！ 驕ることなかれ。

ああ、中大、正に、荒れんとす。

帰りなん、いざ、彼の地、神田へ！

西の方、新宿を過ぎれば、故人なからん。

学員会は、単なる集金組織に非ず、政治的内紛の場に

非ず、中大の行く末を嘆くものなり。

内紛すでに三年に及び、大学の評価、地に落ち、

箱根駅伝さえもあの有様。

大学院大学、今いずこ、教授はテレビで、小遣い稼ぎ。

独りよがり早くやめ、鏡をよく見て、

裸の王になるなかれ。

ああ、中大、正に、落ちんとす。

帰りなん、いざ！ 彼の地、神田へ！

☆都区内(二十三区内)を、その象徴として、神田と表現。

小林 裕